
J E C の源流と歴史的遺産 2

—使徒的キリスト教と J E C—

一宮基督教研究所 安黒務

■ “エバンジェリカル” J E C

今回は、J E C の全体像を理解する鍵が“エバンジェリカル (福音)”という言葉にあること、そして J E C が立っている神学は種々の特色はあるにせよ、基本的には「福音主義神学 (エバンジェリカル・セオロジー)」であることを指摘しました。その具体的な内容を教会の 2000 年の歴史の中にみてまいりましょう。

■ 使信 (メッセージ) そのもの

「聖書が福音 (エバンジェリカル) という場合、それはほかでもなく初代教会の使徒たちが宣べ伝えた使信 (メッセージ) そのものを指しています。現代は、方法とか、成果とか、実存ということが強調され優先される時代です。しかし、ストットⁱは、ローザンヌ会議ⁱⁱの講演の中で第一世紀の使徒たちの宣教にふれ、その中で最も中心的なことは、実に方法でも成果でもなく、使信 (メッセージ) そのものであったと語って注目されました。では、使徒たちが宣べ伝えた福音とは何であったのでしょうか。ひとことで表現するならば、ピリポがエチオピアの宦官に『イエスのことを宣べ伝えた』(使徒 8:35) とあるように、イエスであったと言えるでしょう。ⁱⁱⁱ」私たち J E C は、その時代その時代の様々なムーブメントにオープンな態度をとり、そのすぐれた方策をよいかたちで吸収することにより群れとしての成長を遂げてきました。また、今後ともそのようにして成長を遂げていくことでしょう。しかし、私たち J E C の不変の本質はエバンジェリカルとしての本質であり、使徒たちが宣べ伝えた使信 (メッセージ) そのものであることを見失ってはならないと思います。

■ 主イエスこそ福音そのもの

では、そのイエスを使徒たちは実際にどのように提示したのでしょうか。以前、共立基督教研究所で学びましたときの奥山実師の伝道学のノートには、どの程度詳しく語るかという伝道の五つのレベルについての記述があります。「①神の国 (創造主なる主、愛と義の神、救い主、信仰、…) 使徒 20:25, 27。②神に対する悔い改めと主イエスに対する信仰 使徒 20:21。③キリストの十字架と

復活 I コリント 15:3, 4。④**十字架につけられたキリスト** I コリント 1:23。
⑤**主イエスそのもの** ルカ 23:42, 43 使徒 8:35, 16:30-31。時間を長くかけられるときは、聖書の教えを余すところなく語れますが、ここ一番という言う時には、一言で福音を提示しました。つまり、**イエス・キリストご自身**を最前面に出しました。**主イエス**こそ福音そのものです。人間の運命は主イエスに対してどうするかで決定されます。受け入れますと永遠の祝福へ、拒みますと永遠の滅びなのです。老人伝道、臨終伝道においては第五番目の最もシンプルなかたちでの福音の提示が大切です。^{iv}」私も救われた当初は滝元明師の「神・罪・救い」の**シンプルで情熱的なメッセージ**にひきつけられました。そして信仰生活の歩みの中で聖書の真理の深みと豊かさを少しずつ理解できるようになっていきました。JECには福音への素朴で単純な信仰とともにその深みと豊かさを探求する信仰の両面のバランスがあると思います。

■ 福音の五つの基本的要素

ストットは、使徒たちの福音の提示についてもう少し詳しく述べており、①**福音の事実** (キリストの死・葬り・復活)、②**福音に関する証言** (旧約聖書・新約の目撃者)、③**福音に関する確信に満ちた主張** (生ける救い主の現実)、④**福音の約束** (罪の赦し・聖霊による新しい生命)、⑤**福音の要求** (悔い改め・信仰・バプテスマ) をあげています。

■ 割引も水増しもせず

以上が使徒的福音の骨格です。JECがエバンジェリカルであるということは、以上のような**使徒的福音を割引も水増しもせず**忠実に継承するという事にほかなりません。

i ストット：英国の福音派（エバンジェリカル）のリーダーのひとり。
ii ローザンヌ会議：1974年にスイスのローザンヌで開催された世界伝道会議
iii 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、p.54-55
iv 奥山実「伝道学」講義ノート